ドイツの地方都市パッサウにおける難民支援と言語教育

政策・メディア研究科 修士課程 1 年　荒木萌

1.　研究概要と目的

2015 年、2016 年にドイツでは主に中東出身者が申請した約 120 万件の庇護申請を受理し、そのうちの半数以上が認定された。この庇護申請数並びに認定者数はドイツの難民受入れ史の中でも異常なほどに多い。国としては、難民をドイツで受入れ労働市場への統合を目指して政策を進めている。しかし、難民の労働市場へ統合する際に必要としているドイツ語の習得では、様々な問題が浮上している。

本研究では特に、ドイツの移民・難民政策の一つであるドイツ語教育の統合コースとそれを実施する教育機関、地域住民による言語教育支援活動に着目して調査を行った。それぞれの視座で行われている言語教育を調査することで、それぞれの問題点や課題を相互的に解決できるか検討することが目的である。

2.　研究の成果

今年度は 2017 年 8 月 4 日から 9 月 13 日までの 6 週間と 2018 年 1 月 29 日から 2 月 10 日までの 12 日間、ドイツにて以下の機関でフィールドワークを行った。

対象・場所	調査方法	内容
ドイツ移民難民局（BAMF）	インタビュー	過去 2 年における統合コース、オリエンテーションコースの変更点、難民へのドイツ語教育、ボランティアが行うドイツ語指導についての見解、ドイツ語教員の資格
ゲーテインスティトゥート	インタビュー	ボランティアのドイツ語指導者への支援、オンラインドイツ語教材、ドイツ語教員の資格
パッサウ市の庇護者支援コーディネーター	インタビュー	パッサウでの難民の生活、難民支援に従事するボランティア団体の創設とプロジェクトの開始、町での難民支援ネットワーク、難民の BufDi での可能性、市から見た国の難民支援の役割
VHS(Volks Hochschule)	インタビュー	過去 2 年間での統合コースの参加者やクラスの雰囲気の変化、統合コース以外のドイツ語クラスへの難民の参加と需要、ドイツ語指導における VHS の町での役割
DAA(Deutschen Angestellten-Akademie)	インタビュー及び参与観察	過去 2 年間での統合コースの参加者やクラスの雰囲気の変化、統合コースの進め方
パッサウ大学	インタビュー	大学の Refugee Program について、参加者のドイ

	及び参与観察	ツ語習得と将来、統合における言語教育の見解
PASSgenAU	インタビュー	半ボランティアの存在、学生の難民支援における役割、ドイツ語指導の需要と供給のギャップ
Kinderschutzbund Passau	インタビュー及び参与観察	難民の子供に対する言語支援、難民の母親へのドイツ文化講習、母親同士の交流の場の役割
Asyl Café	インタビュー及び参与観察	「市民のたまり場」での難民との交流の場の役割、難民増加に伴った Asyl Café の活動と仲介的役割
Frauen Café	参与観察	難民の女性が感じるドイツでの生活の難しさやカルチャーショック
Gemeinsam leben & lernen in Europa	インタビュー及び参与観察	完全ボランティア団体の財政と活動、完全ボランティアから見た公的組織への見解
ESG（ボランティアのドイツ語教室）	インタビュー及び参与観察	ボランティアドイツ語教室の成立、2015 年以降の変遷、資格を持たないドイツ語指導者の苦労や努力など
Start with a friend	インタビュー	ドイツ全土で活動する難民支援団体の活動内容、難民支援に関する概観、支援の課題、今後の活動

左：ドイツ移民難民局　　右：DAA

また、当事者である難民にはドイツ語を学ぶ前の難民から既にドイツ語を習得して

自ら難民支援に従事する難民にまで話を聞くことができた。

予定していた通り、さまざまな視座から言語教育を行う機関、人々の話を伺ことができた。今年度の調査では、大別すると難民大量受け入れ時の統合コースの変遷とその背景、パッサウ市の難民支援ネットワークについて深く調査することができた。

2.1 BAMF での調査

国指導で行われている統合コースは、2005 年の新移民法制定と同時に施行された移民・難民を対象としたドイツ語コースである。施行以降は、すでに長期間ドイツに定住していたトルコ人や後期帰国者、欧州出身者がコースの受講者であった。しかし、2015 年以降の難民受け入れで受講者が増大し、受講者の国籍や教育背景が多様化した。

BAMF は難民の急増とその教育背景の多様性に合わせて施策の実施、制度の改正をおこなっているが、課題は多い。中でも注目すべきは、①庇護申請者の統合コース受講で出身国によって難民の中でも差が生まれていること、②識字コースの不足とそもそも統合コースの実施機関、教員の不足である。

難民の早い労働市場統合を目指して、一定の国出身の難民を庇護申請中から統合コースの受講を許可する取り決めを行った。そのため、難民の出身国によってドイツ語の教育格差が生じている。また、統合コースの受講生として識字教育が必要な難民が増えたことから、識字クラスを行う教員と実施機関の不足が問題視されている。統合コース実施機関は識字クラスだけではなく全体で不足している。また、統合コース実施機関の不足の問題は庇護申請中の難民の統合コース受講資格を与えた施策にも影響を与えている。本来ならば 6 週間以内に行われなければならない庇護申請者の統合コース受講開始は、コースの不足から達成に地域差があり平均して約 8 週間待たなければならないのが現実である。

2.2 難民支援者に対する調査

言語教育における難民支援として、ボランティアによる言語教室やドイツ語の会話の練習を行うタンデムプロジェクトが行われている。この 2 つの支援はドイツ全土で行われており、ボランティアとして携わる地域住民も学生も楽しみながら、またやりがいを持って行っている場合が多かった。特に、ボランティアによる言語教室は 2.1 で挙げた BAMF の統合コースでの課題の解決に近づける可能性を秘めている。ボランティアのドイツ語教室は資格を持たないドイツ語教員がドイツ語を教えているものの、ドイツ語を学びたい人だれでも教室を訪れることができる。実際に、受講者は統合コースを受講する資格のない難民も多かった。また、ドイツ語教室に限らずボランティアの活動は意志決定と実行のスピードが速いことが挙げられる。識字クラスも市の語学教室で始められる前に、ボランティアによる識字クラスが始められた。このように、必要とあれば意思のある人が募って、立ち上げられるのがボランティアの利点である。

言語学習に携わるボランティアは他にも、アウトプットの場としての役割を果たす。統合コースなどのドイツ語コースで学んだドイツ語を生活で使う言語として習得するためには、会話を通じてアウトプットすることが重要である。今回調査した Asyl café や Frauen café といった場所では、難民と地域住民、学生が情報の交換、難民のドイツ語の練習に繋がる自由な会話を楽しむ場所の提供を行い、ノートと教科書を使って学ぶというよりは会話の中でドイツ語を学ぶことを一つの目的としていた。また、ボランティアのドイツ語教室を行う ESG でもドイツ人と難民のタンデムプロジェクトを実施し、パッサウ大学でもドイツ人が難民にメンターとして働きかけるプログラムを実施している。

2.3 難民に対する調査

多くのドイツ語を学び始めて大学での勉強や仕事を始めようとする A2～B2 レベルの難民の多くが「ドイツ人の友人がいない」「ドイツ語を会話として話す機会がない」を話した。彼らは 2.2 ででた Asyl café などにも参加しているものの、そこだけの関係となってしまい、彼らが望むドイツ語を話せる環境とは異なるようであった。すでに働いている難民や大学で勉強を始めている難民はドイツ人の友人も多少なりとはいて、比較的堪能なドイツ語を話し、ドイツで生活する将来にも夢を持っていた。つまり、ドイツ語を学習するだけではなくドイツ語を使ってどれだけドイツ人社会に参画しているかが難民本人たちのドイツでの生活の満足度に繋がっているだろうと予想される。

3. 今後の展望

今年度のフィールドワークで様々な視座から難民支援に従事している人から話を伺い、2015 年以降の大量難民受け入れで人々がどのように対応していったか、どのような施策が何のために行われたのかなどを調査することができた。今後は修士論文執筆に向けて、先行研究を読み進めながらこれまで行った調査の分析をさらに行う。また、夏に行ったドイツの統合コースの変遷について JASS 社会言語科学会にて調査報告をする。

4. 謝辞

海外でのフィールドワークが必須の本研究では海外旅費や宿泊費などの大きな費用的負担がある中、本基金の助成は大変大きな援助で充実した調査を実現することができました。ありがとうございました。